

『魏志倭人伝』訓みと現代訳

倭人は帯方の東南の大海の中に在り。山島に依りて國邑を為す。舊、百餘國。漢の時に朝見する者有り。今、使譯通ずるは三十國。

倭人は帯方郡の東南の大海の中に在る。山島に依拠して國や邑(むら)を形成している。旧(もと)は百余國。漢の時に朝見する者がいた。現在、使者、通訳が行き来しているのは三十國である。

(帯方)郡より倭に至る。海岸に循って水行す。韓國を曆る。乍は南、乍は東、その北岸、狗邪韓國に到る。七千餘里

帯方郡より倭國へ行くには、船で韓半島の西海岸に従って南下し、(盾津)で上陸、韓國內をあるいは南に、あるいは東に進んで、狗邪韓國(金海)の倭の領地の北岸に到着する。七千餘里



始めて一海を渡る。千餘里。對海國に至る。その大官は卑狗と云う。副(官)は卑奴母離と云う。絶島に居す。方四百餘里ばかり。土地は山險しく深林多し。道路は禽鹿の徑の如し。千餘戸有り。良田なく、海物を食して自活す。船に乗りて南北に市糶す。

狗邪韓國(金海)から初めて一海を渡る。千里余りで對海國(対馬市)に到着する。その官は卑狗と云う。副官は卑奴母離と云う。對海國(対馬市)は絶海の孤島にある。島は一辺四百里余りの方形である。山は険しく、森も深い。道路は野性の鹿が通う小道のようである。千戸余りの民家がある。良田は無く、海産物を食べて生活している。船に乗って南の国、北の国と交易している。

又南一海を渡る。千餘里。名は翰海と云う。一大國に至る。官は亦卑狗と云う。副(官)は卑奴母離と云う。方三百里ばかり。竹木、叢林多し。三千許の家有り。差(やや)田地有り。田を耕せどなお食不足し、亦南北に市糶す。

對海國(対馬市)から再び南の方向に海を渡ると、千里余りで一大國(壱岐市)に至る。一大國(壱岐市)の官は卑狗と云う。副官は卑奴母離と云う。一大國の形は一辺三百里余りの方形である。島には竹林や叢林が多く、三千戸ほどの家がある。この島は、對海國(対馬)に較べれば田地があり耕作する。だが、やはり、食糧は不足するので、對海國(対馬)と同じように船で南や北に交易する。

又一海を渡る千餘里。末盧國に至る。四千餘戸有り。山、海に濱て居す。草木は茂盛し、行(一行)、前人を見ず。好く魚鮓を捕らえる。水の深淺無く、皆、沈没してこれを取る。

一大國(壱岐市)から再び一海を渡ると、千里余りで末盧國(唐津市)に着く。末盧國には四千戸余りの人家がある。山や海に沿って暮らす。この地には草木が生い茂り、帯方郡の使節一行は前を行く人見ない。この地の人々も、海の水深にかかわらず、皆よく海に潜って、魚やあわびをとっている。



(末盧國の) 東南に陸行五百里、伊都國に到る。官は爾支と云う。副は泄謨觚柄渠觚と云う。千餘戸有り。世(世々)王有り。皆、女王國に統属す。郡使が往來し、常に駐まる。

末盧國(唐津市)から東南に陸路を進むと、五百里(50km)で伊都國(佐賀市)に着く。伊都國(佐賀市)の官は爾支と云う。副官は泄謨觚、柄渠觚と云う。千戸余りの民家がある。代々王がいる。王は、皆、女王國に属する。郡使が往來し、常に駐在する。

(伊都國の) 東南、奴國に至る。百里。官は兒馬觚と云う。副は卑奴母離と云う。二萬餘戸有り。

伊都國(佐賀市)から東南に(船で)百里(10km)で奴國(大川市)に到着する。奴國(大川市)の官は馬觚と云う。副官は卑奴母離と云う。二万戸余りの民家がある。

(奴國から) 東行す。不彌國に至る。百里。官は多模と云う。副は卑奴母離と云う。千餘家有り。

奴國(大川市)から東へ百里(10km)進むと不彌國(筑後市)に到着する。官は多模と云う。副官は卑奴母離と云う。千戸余りの家がある。



(不弥國の)南、投馬國に至る。水行二十日。官は彌彌と云う。副は彌彌那利可と云う。五萬餘戸。
不弥國(筑後市)の南、投馬國(沖縄・那覇市)に至る。水行二十日(船旅20日)の旅程である。官は弥弥と云う。
副官は弥弥那利と云う。五万戸余りの住家がある。

南、邪馬壹國に至る。女王の都とする所である。

(筑後市の)南、邪馬壹國(熊本市中央区京町)に到着する。女王が都とする所である。

水行十日、陸行一月である。

(帯方郡から)女王國(熊本市中央区京町)へは水行十日、陸行一月である。

伊支馬と云う官が有る。次は彌馬升と云う。次彌馬獲支と云う。次は奴佳醜と云う。七萬餘戸有り。

女王國の官は伊支馬。次は弥馬升と云う。次は弥馬獲支と云う。次は奴佳醜と云う。七万戸余りある。

女王國より以北については、その戸数、道里を略載し得た。

女王國より以北の国々については、その戸数、道里を略載することができた。

その他の旁國(ぼうこく)は遠絶。詳細を得るべからず。

その他の旁國は、遠絶で、詳しいことを得ることできない。

次に斯馬國有り。次に巳百支國有り。次に伊邪國有り。次に都支國有り。次に彌奴國有り。次に好古都國有り。次に不呼國有り。次に姐奴國有り。次に對蘇國有り。次に蘇奴國有り。次に呼邑國有り。次に華奴蘇奴國有り。次に鬼國有り。次に爲吾國有り。次に鬼奴國有り。次に邪馬國有り。次に窮臣國有り。次に巴利國有り。次に支惟國有り。次に烏奴國有り。次に奴國有り。

此れ女王の境界の盡(つく)る所である。

(不弥國の)次に斯馬國(みやま市)が有る。次に巳百支國が有る。次に伊那國が有る。次に都支國が有る。次に彌奴國が有る。次に好古都國が有る。次に不呼國が有る。次に姐奴國が有る。次に對蘇國が有る。次に蘇奴國が有る。次に呼邑國が有る。次に華奴蘇奴國が有る。次に鬼國が有る。次に爲吾國が有る。次に鬼奴國が有る。次に邪馬國(熊本市)が有る。次に窮臣國が有る。次に巴利國が有る。次に支惟國が有る。次に烏奴國(宇土市)が有る。次に奴國(宇城市)が有る。

この國(宇城市)が女王倭国連邦の境界の尽きる所である。



その南に狗奴國有り。男子を王と為す。その官狗古智卑狗有り。女王に屬さず。

女王國の南には狗奴國(八代市)が存在する。この國の王は男である。官は狗古智卑狗である。女王連邦に屬さず。

(帶方)郡より、女王國に至る萬二千餘里。

帶方郡から女王國(熊本市中央区京町)に到着するその総距離は一萬二千余里である。

男子、大小無く、皆、鯨面(げいめん・顔の入れ墨)文身(ぶんしん・体の入れ墨)す。

男子は大人、子どもの区別無く、全員が顔や体に入れ墨をしている。

古より以來、その使、中國に詣る。皆、大夫(たいふ)と自稱す。

古代より、その使者が中國に来ている。その使者は、皆、自ら大夫と稱している。

夏后少康(夏六代中興の主)の子、會稽(かいけい・浙江紹興)に封じられる。斷髮し、文身し、以って蛟龍(こうりゅう)の害を避く。今、倭の水人、好んで沈没し、魚蛤(ぎょこう)を捕える。文身し、また以て、大魚、水禽(すいきん)を厭

う。後、やや以て、飾と為す。諸國の文身、各々異り。或は左、或は右、或は大、或は小。尊卑に差有り。

夏后少康の子どもが会稽に封ぜられた。断髪し、入れ墨して、蛟龍(サメ)の害を避けた。今、倭國の水人は好んで沈没して、魚、蛤を捕らえる。体の入れ墨は大魚や水禽を近づけない。後代には装飾となった。倭の国々の入れ墨は各々異なっている。あるいは左に、あるいは右に、あるいは大、あるいは小である。尊卑の差がある。

その道里を計るに、當に會稽(かいけい)の東冶(とうや)の東に在る。

その道里を計ってみると、女王国(熊本市中央区京町)は丁度、会稽の東冶の東に存在することになる。

その風俗、淫ならず。男子は皆露紵(ろかい)す。木綿を以て頭に招け、その衣は横幅、ただ結束して相連ね、ほぼ縫うこと無し。婦人は被髪を屈紵す。作衣は單被の如く、その中央を穿ち、頭を貫きてこれを衣る。

その風俗、婚姻制度が確立している。男子は皆、露紵す。木綿を以て頭に招けている。その衣は横幅で、ただ結束して相連ね、ほぼ縫うことはない。婦人は被髪、屈紵し、作る衣は單被のようである。その中央に穴を空け、頭を貫いてこれを衣る。

禾稻(かとう)、紵麻(ちよま)を種える。蠶桑(さんそう)し、緝績(しゅうせき)し、細紵(さいちよ)、縑緜(けんめん)を出だす。その地、牛、馬、虎、豹、羊、鵲(じゃく)なし。

禾稻・紵麻を種え、蚕桑緝績し、細紵・縑緜を出だす。その地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲(かささぎ)はいない。

兵には矛、楯、木弓を用いる。木弓は下短く上長し。竹箭(ちくぜん)、或は鐵鏃(てつぞく)、或は骨鏃(こつぞく)なり。

武器には矛・盾・木弓を用いる。木弓は下を短く上を長くし、竹箭はあるいは鉄鏃、あるいは骨鏃である。

有無する所、儋耳(たんじ)、朱崖(しゅがい)と同じである。

産物等有る無いは儋耳(広東儋県)、朱崖(広東瓊山県)と同じである。

倭の地は温暖、冬夏に生菜を食す。

倭の地は温暖で、冬も夏も生野菜を食べる。

皆、徒跣(とせん)。屋室有り。父母、兄弟は臥息(がそく)する處を異にす。朱丹(しゅたん)を以て、その身體に塗る。

中國の粉を用いるが如き也。食飲は籩豆(へんとう)を用い手食す。

皆、裸足である。家屋、部屋が有る。父母、兄弟は臥息する處を異にしている。朱丹を以てその身体に塗る、中國において、粉を用いると同じようである。食飲には籩豆(高坏)を用い、手でもって食べる。

その死、棺(かん)はあるが、槨(かく)は無し。土を封じ冢(ちやう)を作る。死より始めて、喪に停まること十餘日、時に當りて、肉を食さず。喪主は哭泣(こくきゆう)す。他人は歌舞(かぶ)に就き、飲酒す。己に葬れば、家を擧げて、水中に詣(いた)り、澡浴(そうよく)す。以て、練沐(れんもく)の如きなり。

死ぬと棺に収める。しかし、槨(そとばこ)はない。土を封じて冢を作る。死んだ時から喪に服するのは十余日である。その時は肉を食わず。喪主は哭泣する。しかし、他人は歌い舞い、酒を飲む。埋葬をすますと、家の人、皆が水に入って澡浴する。それは練沐のようである。

その行(倭國の一行)來たり。海を渡り、中國に詣(いた)る。恆(つね)に使者の一人は頭を梳(くしけず)らず。蟻蝨(きしつ)を去らず。衣服は垢汚(こうお)。肉を食せず。婦人を近づけず。喪人(そうじん)の如し。これを名づけて持衰(じさい)と為す。

倭國の使節一行が来る。海を渡って中國に到着する。その時、いつも、使者の一人は頭をくしけず、シラミを取らず。衣服は垢で汚れたままにする。肉を食せず。婦人を近づけず。まるで喪に服する人の如くである。これを名づけて「徐災(じさい)」と為す。

若し、行(倭國の一行)が吉善(きつぜん)ならば、共にその生口(しょうく)、財物を顧す。若し、疾病に罹(かか)り、暴害(ぼうがい)に遇うならば、すなわち、これを殺さんと欲す。その持衰が謹(つつし)まずと云えばなり。

もし、倭國の一行に何事もなく、うまくいけば、徐災(じさい)となった人の生口(子どもの職人)や財物を顧す(不詳)。もし、一行が疾病になったり、暴害に遭ったりすれば、徐災(じさい)を殺そうとする。それは、徐災(じさい)が謹まなかつ

たからこうなったのだというのである。

眞珠・青玉を出だす。その山には丹有り。その木には・(だん)・杼(ちよ)・豫樟・(ぼう)・樾・投・櫃(きよう)・烏號・楓香が有る。その竹には篠・箨・桃支が有る。薑(きよう)・橘・椒(しょう)・藁荷(じょうか)が有るが滋味と為すを知らず。獼猴(せんこう)・黒雉有り。

眞珠・青玉を産出する。その山には丹あり。その木には・(くす)・杼(とち)・豫樟(くすのき)・(く)・杼(ぬぎ)・投(すぎ)・かや・僵(かし)・烏号(やまぐわ)・楓香(おかつら)あり。その竹には篠(しの)・箨(やたけ)・桃支(かすらだけ)がある。薑(しょうが)・橘(たちばな)・椒(さんしょう)・藁荷(みょうが)があるが、滋味とする料理方法を知らない。獼猴(さる)・黒雉がいる。

その俗、事を擧げる行(一行)來たり。云爲(うんい)する所、有り。輒(すなわ)ち、骨を灼(や)きて、トとす。以つて、吉凶を占う。先ず、トするところを告げる。その辭は令龜(れいき)の法の如し。火垢(かたく)を視て、兆を占う。

その風俗。仕事を起こす一行が來る。お告げをいう場所がある。そこでは、骨を焼いてト(ぼく)を作る。そして、吉凶を占っている。先ず、ト(ぼく)を告げる。その言葉は、令龜の法のようなのである。火垢(かたく)を視て、兆を占う。

その會同(かいどう)の坐起(ざき)には、父子の別、男女の別無し。

人々が一同に会する時の着座や、起立の仕方には父子の順位、男女の順位などの区別は無い。

人の性(性質)は、酒を嗜(たしな)む。

人の性質は酒を嗜む。

大人(だいにん)が敬む所を見れば、但(ただ)、手を搏(う)ちて、以て、跪拜(きはい)に當てる。その國の人の壽考(じゅこう)は、或は百年、或は八、九十年。

大人(倭國の支配層)が敬むのを見れば、ただ手を搏ち、以て、跪拜の代わりとする。その國の長寿の人は百歳、あるいは八、九十歳である。

その俗、國の大人は皆、四五婦。下戸の或は、二三婦。婦人は淫せず、妬忌(とぎ)せず。盜竊(とうせつ)せず、諍訟(じょうそう)少なし。

その法を犯す。輕きはその妻子を没す。重きは、その門戸及び宗族を滅す。尊卑各差序有るも、相臣服に足る。

その風俗、倭國の大人は皆四、五人の妻を持つ。下戸もある者は二、三人の妻を持つ。婦人は貞淑で、妬忌しない。盜竊もなく、諍訟も少ない。もし、法を犯せば、輕きはその妻子を没し、重きはその門戸および一族を滅ぼす。尊卑各々差序があるが、お互い臣服するに足る。

租賦(そふ)を収める邸閭有り。國國に市有り。有無(うむ)を交易す。使大倭(役職)がこれを監(かん)す。

租賦(年貢)を収める邸閭がある。國々に市がある。有無を交易し、「使大倭」がこれをとりしまっている。

女王國より以北(の国々)に一大率を特置す。諸國を檢察す。諸國、これを畏憚す。常に、伊都國を治す。(伊都)國中において、刺史(りし)の如き有り。

女王國より以北の国々(狗邪韓國・対馬・壱岐・末盧國・伊都國・奴國・不弥國)に対しては、一大率を特置している。一大率はこれらの諸國を檢察している。諸國はこれを畏れ憚っている。常には、伊都國(佐賀市)を治す。だから、伊都國(佐賀市)には魏における刺史(郡國を刺挙し、その政績を報告する官)のような役人が國中に居るようである。

(伊都国)王、使(者)を遣わし、京都(洛陽)・帶方郡・諸韓國及郡に詣る。

伊都國(佐賀市)の王は、使者を派遣し、魏の京である洛陽、帶方郡、諸韓國の郡を訪問した。

使倭國(倭國の使)は皆、津に臨みて傳送(でんそう)の文書、(皇帝からの)賜遺(しい)の物を搜露(そうろ)し、女王に詣(いた)る。

使倭國(倭國の使者)は皆、津(熊本市川尻港)までやって來ると、帶方郡太守から伝送されてきた文書や皇帝からの賜遺の品物の梱包をほどいて、女王の下に運ぶ。

差錯(ささく)を得ず。

こうすると、「過不足」や「交錯」が生じることがない。

下戸が大人と道路で相逢えば、逡巡して、草に入る。辭を傳え、事を説くには、或いは蹲(うずくまり)、或いは跪(ひざまづ)く。両手を地に據(きよ)す。これが恭敬(きょうけい)を為す。

下戸が大人と道路で相逢えば、進むことをためらって、道ばたに避ける。辭を伝え、事を説くにはうずくまったり、または、ひざまづき、両手を地につける。これが恭敬の表れである。

對應(たいおう)の聲は、噫と云う。(中国語に)比するに、然諾(ぜんだく)の如し。

対応の声を「噫(あい)」という。これは中国語と比較すると「然諾(ぜんだく)」という言葉に相当する。

その國、もとは、また、男子を以て王と為す。住(とど)まること七、八十年。倭國亂れ、相攻伐すること、年を歴(へ)る。すなわち一女子を共立し王と為す。名は卑彌呼と云う。

その國(倭国連邦)は、もとは、男子を立てて國王とした。在位が七、八十年続いた。その間に倭國連邦22国は乱れ、相攻伐すること、10年ほど続いた。そこで、連合22の国の王が、共に、一女子を立てて、連邦の王とした。その王の名前を「卑彌呼」という。

鬼道(祈禱)を(仕)事とし、能く、衆を惑す。

卑彌呼は祈禱を仕事とし、よく、民衆を導く。

年已に長大。夫婿(ふせい)無く、男弟有り。佐(たす)けて國を治む。王となりしより以来、見るは少なし。婢千人を以って、自ら侍らす。ただ、男子一人有り。飲食を給し、居処に出入し、辭を傳える。

年は已に長大である。夫婿はなく、男弟がいる。彼は女王を助けて國を治めている。卑彌呼が王となってからは、その姿を見ることはほとんどない。侍女千人を以て自らに侍す。ただ、男子一人あり、飲食を給し、辭を伝え居処に出入す。

宮室、樓觀、城柵を嚴しく設ける。常に人有り。兵を持って守衛す。

宮室・樓觀・城柵を厳かに設けている。常に人がいて、武器を持って守衛している。

女王の國の東、海を渡る千餘里。また國有り。皆倭種なり。又、侏儒國がその南に在り。人の長(たけ)、三、四尺。

女王國(熊本市)の東、海を渡って千余里にまた國がある。皆、倭種である。また、侏儒國が女王國の南にある。その國の人の身長は三、四尺である。

女王を去る四千餘里。又裸國、黒齒國有り。また、その東南に在り。船行一年で至るべし。

女王國(熊本市)から四千余里。また裸國・黒齒國がその東南にある。船行一年にして到着する。

倭地を參問するに、海中の洲島の上に絶在す。或は絶え、或は連なる。周旋は五千餘里なり。

倭の地を參問するに、海中の洲島の上に絶在する。あるいは絶え、あるいは連なる。周回を廻ると五千余里ばかりである。

景初二年(238年、皇帝曹叡の元号)六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし、(帶方)郡に詣る。天子に詣り、朝獻せんことを求む。

景初二年(西暦238年)六月、倭の女王は大夫「南将・まい」等を使者として帶方郡に至った。彼らは魏の天子に詣りて、朝獻することを求めた。

太守劉夏(りゅうか)、吏將を遣わし、(南将、米等を)京都(洛陽)に送り詣る。

帶方郡の太守、劉夏は、吏將(部下の役人)を遣わし、使者「南の将・米」等一行を魏の都、洛陽に送り、到着した。

その年(238年)の十二月、(魏の皇帝は)詔書し、倭の女王に報じて曰く。

その年(238年)の十二月、魏の皇帝は詔書して、倭の女王に次のように伝えた。

親魏倭王、卑彌呼に制詔す。帯方太守、劉夏は使者を遣わし、汝の大夫、難升米(灘の将・まい)、次使の都市牛利(としのぎゅうり)を(洛陽に)送ってきた。

親魏倭王・卑彌呼に申し渡す。帯方の太守劉夏が使者を遣わしてきて、汝の使者大夫「南将・米」と、次使、「都市牛利」を洛陽まで送ってきた。

汝が献する男生口(しょうく)四人、女生口(しょうく)六人、班布(はんぷ)二匹二丈を奉りて到る。

汝が献上した男の小工四人、女の小工六人が班布二匹二丈を奉じ、やって来た。

汝の所在、踰(はるか)に遠きも、乃ち、使者を遣わし貢献す。これ汝の忠孝なり。我、甚(はなは)だ汝を哀れむ。

汝が住む所は遙かに遠いにもかかわらず、このように使者を遣わして貢献す。これ、汝の忠孝である。我は、はなはだ、汝をいとおしく思う。

今、汝を以て、親魏倭王と為し、金印紫綬(きんいんしじゆ)を假(か)す。

今、汝を「親魏倭王」となし、紫のくみひものついた金印を仮す。

装封して、帯方の太守(劉夏)に付し、假授(かじゆ)す。

金印紫綬を装封して、帯方の太守(劉夏)にことづけて、假授する。

汝、その種人(しゆじん)を綏撫(すいぶ)し、勉めて、孝順を爲せ。

汝、その人民を安んじいたわり、勉めて皇帝への孝順をなせ。

汝の來使、難升米、牛利(ぎゅうり)は遠きを涉(わたり)、道路勤勞す。今、難升米を以て、率善中郎将と為し、牛利を率善校尉と為す。銀印青綬を假(か)し、引見(いんけん)、勞賜(ろうし)し、遣わし、還(かえ)す。

汝の來使、「南将・米」と「牛利」は遠きを越えて、道路を苦勞してきた。今、「南将・米」を以て、「率善中郎将」となす。「牛利」を「率善校尉」となす。銀印青綬を仮に与え、引見し、ねぎらつて、遣わし還す。

今、絳地(こうち)交龍錦五匹・絳地繡粟罽(すうぞくけい)十張・菁絳(せんこう)五十匹・紺青(こんじょう)五十匹を以て、汝が献貢に直に答える。

今、絳地交龍(赤地にミズチと龍の模様を織る)錦五匹、絳地銘粟罽(赤地に細かいケバの付いた毛織物)十張、菁絳(茜で染めた赤色の布)、紺青(色の布)五十匹を与え、汝の貢献にただちに応えよう。

又、特に汝に紺地句文錦三匹・細班華罽(さいはんかけい)五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠鉛丹各五十斤を賜い、皆、装封して難升米、牛利に付す。

また、特に、汝に紺地句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十匹、金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠鉛丹を各々五十斤を賜う。全て装封して、「南将・米」・「牛利」に託した。

(彼らが國に)還り到らば、録受(ろくじゆ)し、悉(ことごと)く、以て、汝の國中の人に示し、國家(魏皇帝)が汝を哀れむと、使知(しらしむ)べし。

故に、鄭重(ていちょう)に、汝に好物を賜うなり。

彼らが國に帰って来た時、目録と照合して受取り、全てのものを汝の國中の人に示し、國家(魏皇帝)が汝を哀れむと知らしめよ。故に、鄭重に汝にとびきり素晴らしい物を賜うなり。

正始元年(240年、第三代皇帝曹芳の元号)、太守弓遵(きゅうじゆん)は建中校尉、梯儻(ていしゆん)等を遣わし、(彼らは)詔書(皇帝の命令書)と印綬(先の金印紫綬)を奉じて、倭國に詣る。

正始元年(西暦240年)、帯方郡の長官、太守弓遵は建中校尉梯儻らを使者として倭國に派遣した。梯儻らは皇帝の詔書と金印紫綬を奉じて倭國に来た。

倭王井(かつ)に拝假(はいか)し、詔を齎(せい)し、金帛(きんぱく)・錦罽(きんけい)・刀・鏡・采物を賜う。

倭王「井(かつ)」に会い、魏皇帝の詔を与え、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。

倭王、因りて、使(梯儻)に上表(皇帝への返書をしたため)、詔恩(皇帝の詔と恩)に答謝す。
そこで、倭王「井(かつ)」は使者に皇帝へのお礼の書を託し、皇帝の詔と恩に答え感謝した。

その四年(243年)、倭王、また使(者)、大夫(たいふ)伊聲耆、掖邪狗等八人を遣わし、生口(しょうく)、倭錦(わきん)、絳青縑(こうせいけん)、緜衣(めんい)、帛布(はくふ)、丹、木・(もくふ)、短弓、矢を上献す。掖邪狗等は率善中郎将の印綬を壹拝す。

正始四年(西暦243年)、倭王は、再び、大夫「伊聲耆」、「掖邪狗」等八人を派遣して、「小工」、倭錦、絳青縑、緜衣、帛布、丹、木・、短弓、矢を献上した。「掖邪狗」らは、「率善中郎将」の印綬を頂いた。

その六年(245年)、詔して、倭の難升米(南将・米)に黄幢(こうどう)を賜い、(帯方)郡に付して假授す。

その六年(西暦245年)、皇帝の命により、倭の「南将・米」に黄幢(魏の黄色い旗さし)を与え、帯方郡長官に託して假授した。

その八年(247年)、太守王頎(おうき)、官(帯方郡の役所)に到る。

その八年(西暦247年)、太守、「王頎」が帯方郡の官庁に赴任してきた。

倭の女王、卑彌呼、狗奴國の男王、卑彌弓呼と素(もと)より和せず。倭の載斯(祭祀)烏越等を遣わし、(帯方)郡に詣り、相攻撃する状を説く。

熊本市の女王「卑彌呼」は、狗奴國(八代市)の男王卑彌弓呼と元々仲が良くなかった。そこで、女王は倭國の祀司、烏越(宇悦)等を帯方郡に派遣して、両国の争いの様子を説明した。

(太守王頎は)塞曹掾史(さいそうえんし・郡の属官名)張政(ちようせい)等を遣わし、因りて、詔書・黄幢(こうどう)を齎(せい)し、難升米(灘の将・米)に拝假す。檄(回状)を為して、之を告諭(こくゆ)す。

それを聞いて太守は、属官の「塞曹掾史」、「張政」等を派遣して、皇帝の命令と黄幢を持参して、「南将・米」に会い、与えた。彼は回状を作って、このことを國の人々に告示した。

卑彌呼、以て、死す。大いに冢(ちよう)を作る。徑百餘歩。徇葬(じゆんそう)する者は奴婢百餘人。

卑彌呼が死去した。大きな塚が作られた。その塚の直径は約百歩(33m)であった。百人以上の奴婢が殉葬された。

更に男王を立てるも、國中服せず。更(こもごも)、相誅殺(ちゆうさつ)し、當時、千餘人を殺す。また卑彌呼の宗女(しゅうじょ)、壹与(いよ)、年十三を立て王と為す。國中遂に定まる。

倭國連邦は、以前と同じように、男王を立てたが、國中が治まらず、お互いに千人以上が死んだ。そこでまた、再び歳十三の卑彌呼の宗女(一族の娘)「壹与」を立てて王とした。そこで、やっと、倭國連邦内の争いが治まった。

政等、檄(回状)を以て壹与を告諭(こくゆ)す。壹与、倭の大夫率善中郎将、掖邪狗等二十人を遣し、政等を送り還す。因りて、臺(洛陽中央官庁)に詣り、男女生口(しょうく)三十人を献上し、白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雜錦二十匹を貢す。

張政等は回状でもって、「壹与」が王位についたことを倭國連邦に告示した。「壹与」は倭の大夫、率善中郎将「掖邪狗」等二十人を遣わし、「張政」等を帯方郡に送り帰した。そうして、彼らは、臺(洛陽)に到着して、男女の小工(子どもの職人)三十人を献上し、白珠五千孔・青大句珠二枚・異文雜錦二十匹を貢上した。